

## 奈良・紀寺跡

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村大字小山
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)八月〜九月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 七世紀後半〜八世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

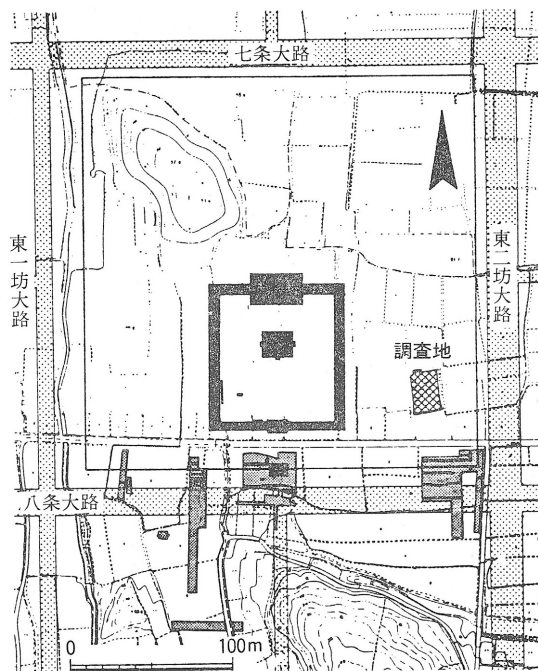
紀寺跡は藤原京左京八条二坊にあり、平城京の紀寺の前身寺院と考えられている。一九七四年に発掘調査が行われ、南門・中門・金



(吉野山)

堂・講堂が南北に並び、中門から出た回廊が講堂に取り付く伽藍配置と、南門に取り付く南面大垣等が確認された。塔は中軸線上にも、金堂西南部にも検出されず、未調査の東南部に想定される。

紀寺の造営・廃絶の時期

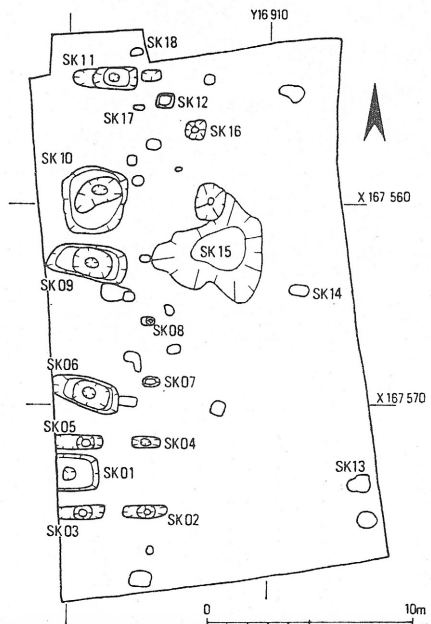


紀寺跡伽藍配置図

はあまり明瞭ではないが、軒瓦等から金堂等の中心伽藍は七世紀後半代に、南門や大垣は藤原宮の造営と並行して整備されたと考えられ、金堂跡に瓦窯の作られる奈良時代末〜平安時代初めには廃絶していたとみられている。

今回の一九八七―一次調査は、寺域東南部で水田改良工事の事前調査として行ったもので、調査地は南北二六m、東西一五m、面積は三九〇㎡である。

検出した主な遺構は、大小一六基の土壇である。これらの土壇は東西方向の溝状を呈するものが多く、調査地の西寄りに南北に並ぶ。



1987-1 次調査遺構略図

形態や埋土の状況、遺物の種類はほぼ同じである。一例を示すと、SK11は東西二・二m、南北一・一m、深さ一・四mで、中央部は円形でやや深い。埋土は、上層は木炭・瓦・土器・焼土を含む暗褐色粘土であり、中層は銅滓・木炭を含む短期間に埋められた層、下層は砂・葉を含む青灰色粘土である。多くの土壙から炉床・フイゴ羽口・埴塙・湯口・バリの屑が出土した。SK10には漆の容器として使用された大量の壺類が一括投棄されていた。また僅かながら金箔が出土した。

これらの土壙は紀寺造営終了時に、鋳銅工・漆工・箔工等が作業していた工房の廃止に伴い、不用物を投棄したものとみられ、それは藤原京の造営に伴う寺域内外の整備とも関連するであろう。

木簡は銅滓層下の木製品・木片・自然木・葉を含む層と、銅滓層上の粘土層から一四点出土した。ほとんどが断片か削屑で、人名とみられるものが二点ある他は意味の取れるものが少ない。

8 木簡の積文・内容

(1) 下毛野人 □ 091

(2) [「下カ」] 118×25×3 033

(3) ・×□可三万呂 (108)×28×2 081  
 ・×□〔目カ〕

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一八』(一九八八年)

(加藤 優)